

## 維新「改革」下の大阪

加藤駿・共同通信記者の表題「ルポ 多層社会をゆく」（大阪日日新聞 4月30日）を抜粋して紹介したい。

市民の憩いの場で、観光名所でもある大阪城公園。JR森ノ宮駅側から入ると、遊具が堀で区切られた有料のものと、無料のものに分かれている光景が目についた。コンビニや世界的カフェチェーンの店舗が取り囲む広場は、商業モールの一角のようだ。

「営利施設を造るため多くの木が切られ、鳥が来づらくなってしまいました」と、付近に住む野鳥愛好家の荒木涼子さんは言う。

しばらく歩くとバーベキューの「全面有料化」を伝える看板が現れた。公園の管理は市のパークマネジメント事業（PMO）で委託を受けた企業

の連合体が担う。「商売する人とお客さんの場になった。わざわざ公園をそうせないかんの」と訴える荒木さんに、酒井隆史さん（大阪公立大教授）は「企業が新たな利益をシェアする場になってしまっている」。

「おかしな風景だよなあ……。落差がありすぎる」。次に訪れた JR新今宮駅前で酒井さんが首をかしげた。目の前には昨年4月開業のホテル「OM07 大阪 by 星野リゾート」が要塞のようにそびえる。環状線を越えて西成区に入ると、日雇い労働者の求人などを担った複合施設「あいりん総合センター」が姿を現す。耐震問題を理由に19年に閉鎖され、周辺で野宿生活するホームレスらを相手に、大阪府が立ち退き訴訟を起こしている。付近で野宿する60代男性に聞くと「ほかに行くところもないもんね」。

近代以降、移民と労働者の街として発達し、既成の価値観を問い直す対抗運動が盛んだった大阪。そこには、地元の人々が時間をかけて磨き上げた街の魅力、重層性を大切にする独自の文化があった。その魅力に引き寄せられるように街を歩き、酒井さんが書き上げたのが11年刊行の「通天閣」だった。

その街が「成長」「改革」の名の下、消費の論理と観光客の取り込みによって変質していく。「以前から進んではいたが、維新の政治でタガが外れた。風景や空間構造のここまでの変質は……つらいものがありますね」

このルポに注目したのは、大阪が「変質する街」であることを、大阪に転居してから実感したからだ。なぜ大阪維新の会が支持されるのか、そのヒントを得たいためだ。

(2023年5月8日)

